学習内容報告書 フォーマット

学校名	独立行政法人国立高等専門学校機構　広島商船高等専門学校
授業者	薮上　敦弘

1.　単元計画

実施した活動内容に基づきご記入ください。

1-1.　単元名

海辺の安全教室（水難から命を守る方法）

1-2.　学年

基礎編：小学校全学年　・　応用編：小学校４～６年生

1-3.　教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

総合的な学習の時間・体育

1-4.　単元の概要

基礎編

水難事故に遭遇した際にも対応できる「知識」・「スキル」を身につけることを目的とする。座学学習プログラムでは、学習スライドおよび配布資料（学習のしおり）を用いクイズやディスカッションなどを交えながら、主体的・対話的・深い学びを得るようにする。実技学習プログラムでは、プールにて学んだ内容を振り返りながら、様々な体験（着衣泳法・背浮きなど）を通じ、自己救命に関する技能を身に付ける。

応用編

離島にて生活する児童たちが日常的に使用する船（フェリー）に着目し、万が一船での事故に巻き込まれた時のため、船から海への飛び込みや救命いかだへの乗り込みなど身を守る方法を基礎的な体験を通じて学ぶことを目的とする。

1-5.　単元設定の理由・ねらい

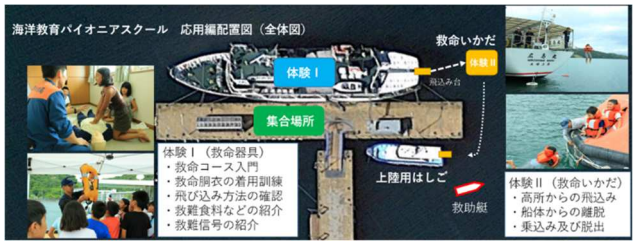
島内に暮らす人々は海に触れる機会が多く、子供たちにとって海は重要な遊戯施設の一つであり海で遊ぶ機会が多い。故に事故に遭う確率も高いと推測した。事故について調査したところ、海上保安庁の統計では平成 28 年度のマリンレジャーに伴う事故者数が全体のうち、遊泳中の事故が約 37%を占め、年齢別の事故者数では 20 歳未満の割合が約 40%であり、子供たちが遊泳中に事故に遭う確率が高いことが分かる。そのため、子供たちに対し海の安全をテーマに海洋教育を行うことにより、水難事故の防止につながると考えた。

1-6.　育みたい資質や能力、態度

離島で生活する子供たちにとって、海との関りは非常に重要な要素である。普段何気なく接してきた海をより身近な存在に感じさせ、「知識」や「スキル」があれば海は危険な場所ではなく、海の豊かさ美しさを再発見させる。また教育プログラムを通じ困難なことに対する挑戦力、またそれを乗り越えた際に得られる成功体験や経験を通じ、挑戦し続ける姿勢の育成を行う。また命の大切さについて学び「自己の命のみならず、隣人の命も救える」災害でも生き抜く力の育成を目指す。

1-7.　単元の展開（全　６．０　時間）

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
1.5	・座学学習プログラム 　学習スライドと配布資料を照らし合わせながらの学習を行う。 （1）遊泳中での事故発生状況と危険要因 　離岸流や天候等の状況などが溺水の主な原因になっていることや、離岸流の説明及び離岸流に巻き込まれた際の対応方法、海洋に生息する危険な生物について説明する。 （2）溺水の原因について 　溺水の原因につながる例を具体的に説明する。 （3）溺水した時の対策 　溺水した時の対処法、浮力体がある場合と無い場合の自分のとるべき行動、身近にある浮力体について説明する。 （4）溺水者を発見した時の救助法 　溺水している人を見つけた場合、どのような行動をとるべきかについて学び、溺水者の救助法について説明する。	・指導内容 （1）児童たちが遊泳時において、事故に遭わないように発生状況や危険要因について知ることを目的として指導する。 （2）溺水の発生原因について理解することを目的として指導する。 （3）救助が来るまでの間、自らが行うべき行動について理解し、対処法を学ぶことにより、慌てず対応できる知識を得ることを目的として指導する。 （4）溺水者を発見した場合、どの様な行動をとるべきかについて学び、溺水者の救助法について知ることを目的として指導する。 ・評価方法 クイズやディスカッション時に、自分の考えを積極的に発言出来ているかどうかで評価する。
1.5	・実技学習プログラム プールにて、座学で学んだ内容を振り返りながら、実技を学ぶ。 （1）着衣泳法 服を着たまま水に入り、水の影響の受け方や、体の動きが制限されることで焦りやパニックに陥りやすくなることを学ぶ。 （2）背浮き 溺水してしまった際の対処法として「背浮き」があり、背浮きの方法について習得する。 （3）身近にある浮力体を用いた泳法 ランドセル、空のペットボトル、発泡スチロールを用い、浮力体を用いることで背浮きより容易なラッコ浮きができることを学ぶ。 （4）ライフジャケット着用の重要性 ライフジャケットの有無による浮力の違いや、着用時の着心地などを学び、重要性を認識させる。	・指導内容 （1）自らの生命を守るために必要な技能の一つであり、実技を通じ身体で覚えることを目的として指導する。 （2）背浮きは体力を温存できるため、救助を待つ際に有効に活用することで生存率を高めることが出来る。背浮きを習得することを目的として指導する。 （3）浮力体がある場合とない場合での浮きやすさの違いを理解することを目的として指導する。 （4）海辺にて活動する際には、ライフジャケットを着用することが重要であると認識させることを目的として指導する。 ・評価方法 技能の取得状況を確認し評価する。 ・外部連携 実技学習プログラム実施にあたり、指導者はあらかじめ消防署などにて行っている普通救命講習を受講し安全対策を行う。

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
3.0	・非常時における船舶からの脱出法を取得する。 （1）救命法について 気を失った溺水者の緊急救命法である心肺蘇生法を学ぶ。（救命入門コースを受講） （2）船の避難経路について 陸上の建物と違い、船は構造が複雑であることを説明し、普段利用するフェリーなどを例にし、非常時における避難経路や対処法などについて学ぶ。 （3）非常食の試食体験 災害時などに非常食として用いられるアルファ米や船舶用非常食、救命水などを試食する。 （4）救命器具の取り扱いについて 船舶に搭載されている救命胴衣の取り扱い方法について学ぶ。合わせて一般的なレジャーに使用される膨張式救命胴衣について説明し、船舶に搭載されている救命胴衣との違いを学ぶ。 （5）船舶からの脱出（高所からの飛び込み） 緊急時、船から脱出しなければならない状況に陥った時に、どのようにして海に飛び込めば良いかや飛び込み時の姿勢や方法について学ぶ。また飛び込みの後は、救命いかだに乗り込み構造などについて学ぶ。	・指導内容 （1）消防署と連携し、適切な指導者（消防職員など）の下実施する。緊急時において応急的な処置が出来る様になることを目的として指導する。 （2）船内に掲示されている避難経路や救命胴衣が格納されている場所の確認を行い、特定の場所から船外までの脱出経路を確認する。 （3）災害発生時における、衣食住のイメージを持たせ、普段の生活との違いを認識させることを目的として指導する。 （4）身近な救命器具の使用法を前もって知ることにより、事故に遭遇した際の生存率の向上につながる。 （5）救命胴衣の着用方法や飛び込み時の姿勢を習得し、救命胴衣着用時の遊泳についても学ばせる。  図：全体図

2.　学習活動の実際

実施した単元中のキーとなるような時間（導入の時間・主となる活動の時間・まとめの時間など）の学習内容をご記入ください。また、複数の時間についてご記入いただける場合には、この項目をコピーして複数記入していただいて構いません。

2-1.　単元における位置づけ

単元　6　時間中の　6　時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目　／ 単元 15 時間中の 4, 5 時間目

2-2.　本時の目標

1. 水難事故を想定し、水難事故に遭遇した際にも対応できる「知識」・「スキル」を学ぶ。（座学学習）
2. 着衣のまま水に入ったときの感覚の違いや、動きが制限されることを、体験を通じて学ぶ。（実技学習）
3. 水難事故発生時における対処法や防止策（救命胴衣の着用）、救助法について学ぶ。（実技学習）
4. 船での事故に巻き込まれた際の、船からの脱出を想定した対応方法について学ぶ。（実技学習）

2-3.　本時の展開

主な学習活動 ／ 反応	教師の指導・支援 ／ 評価の視点（方法）
座学学習プログラム 1. 集合・整列・挨拶をする。 2. 学習のめあて（目標・目的）を確認する。 ※学習のしおりの内容を確認し、学習スライドと照らし合わせて授業を進めることを説明する。 3. 遊泳中における事故発生原因や危険要因について学ぶ。【知識・理解】 4. 溺水の原因や対処方法、溺水者の救助法について学ぶ。【知識・理解】 ※水難事故の怖さについて意識を新たにさせ、授業の意義を理解し、準備を整える。	□自由に誰でも発言できる雰囲気づくりに努める。 □自由に発言することにより、学習活動への興味、関心を高めていく。また、仲間の発言をもとに議論を交わし、答えを導けるような工夫を行う。 □互いの意見を紹介し、意見交換することで質問の質を高めていけるようにする。 評価方法 ◇積極的に発言し、なおかつお互いの意見を交換できる。 ◇意見交換時にリーダ役となり、意見を取りまとめることができる。
実技プログラム（着衣泳・背浮き・救助法） 1. 集合・整列・挨拶 2. 学習のめあて、学習の流れを確認する。 3. 準備運動・シャワー 4. 着衣による感覚の違い【思考・判断】 5. 着衣に適した泳ぎ（背浮き・ラッコ浮き）【技能】【思考・判断】【関心・意欲・態度】 6. 身近にある浮力体を用いた救助法【知識・理解】 7. 実技プログラムの振り返り・まとめ【知識・理解】【関心・意欲・態度】 ※水難事故に遭遇した際には、動かずその場で救助を待つことを教える。合言葉は「浮いて待て」	※安全に十分配慮し、全体に目配りながら実施する。 □自他の命と生活を守るために、適切に行動することが出来る【目標】 □着衣での入水を体験させ、対応方法を理解させる。 図：背浮き 図：ラッコ浮き

実技プログラム（船からの脱出）

非常時における船からの脱出など、身を守る方法を体験を通じ学ぶ。

1. 集合・整列・挨拶

2. 学習のめあて、スタッフの自己紹介、学習の流れを確認する。

3. 救急医療の大切さについて学ぶ。（講義形式）

4. 救命実習（救命入門コース程度）を行う。【技能】

①消防職員による模範演技を見る。

②手順・注意点などを確認する。

③胸骨圧迫・人工呼吸の実技を行う。

④AED の取り扱い方法について学ぶ。

5. 船の避難経路について学ぶ。【関心・意欲・態度】

①船内を見学し、安全避難場所や経路を確認する。

6. 災害時における非常食を知る。【知識】

①非常食の種類や、調理法について学ぶ。

②実食し、感想を言う。

7. 救命器具の取り扱いについて学ぶ。【技能】

①船舶に搭載している救命胴衣の着用する。

②救命胴衣の種類と違いについて説明する。

8. 船からの脱出【技能】【関心・意欲・態度】

①船からの脱出する際の注意点について説明する。

②船から飛び込む際の姿勢と方法について説明する。

・片手で鼻を塞ぎ、もう一方の手で胸部を抑える。

③救命胴衣を着用し、船から飛び込む。

④飛び込み後速やかに救命いかだへ移動する。

⑤救命胴衣を着用した際の泳法について実技する。

9. 救命いかだへの乗り込み【技能】

①救命いかだの構造について説明する。

②救命いかだへの乗り込み方法について実技する。

・救命いかだのはしごを利用して乗り込む。

③遭難時における、漂流体験をする。

・救命いかだ内部の構造や環境を確認する。

10. 実技プログラムの振り返り・まとめ【知識・理解】【関心・意欲・態度】

□危険が伴う学習であることを周知し、安全確認を十分行う。

□命を守るためには、適切な行動・知識・技能が必要であり、これらを習得する必要があることを説明する。

□消防職員の方々に随時ポイントについて質問し、児童の興味を引き出すようにする。

□大切なことについては、メモをしながら聞くよう指示する。

□防災の観点から、常日頃から避難場所や避難経路の確認が重要であることを説明する。

□災害発生時における、衣食住の環境について説明し、普段の生活との違いを認識させる。

□救命胴衣を着用する際は手順に従い、着用する。

※一人で着るのが難しい場合は適時サポートする。

□船から飛び込む際、必ず救命胴衣確認を行い、飛び込み姿勢、その後の行動について指示をする。

	□飛び込み後、救命胴衣が脱げていないか確認する。 □児童が水難事故防止を意識して日常生活を送れるよう、まとめの話をする。 □児童代表から感想を全体に対し言う。

3.　今回の活動の自己評価

教育プログラムを通じ、児童たちの海や船に対する危険意識の向上や認識の変化を確認することができ、教育効果の有効性を確認することが出来た。またアンケート内の感想欄には「実物を伴った説明で分かりやすかった」、「対応がとても丁寧だった」、「教えてもらったことを活用したい」などの感想が多く見られた。これらから、水難に遭わないような行動、自分もしくは他人に対する救命方法や正しい知見を身につける教育をすることができたと言える。またプログラム体験者からの評価は高く、水難事故防止を目的とした海洋教育プログラムを開発することが出来た。

これにより、2020 年より随時実施される海洋教育のための具体的な一例を示し、大崎上島にて暮らす児童たちの事故防止にも寄与することが出来た。

座学の様子

プールにて実践

船から飛び込む

救命いかだ体験

4.　今後の課題

一度のみの体験では学習効果を高めることが困難なため、学年に合わせた内容で毎年一回行うといった方法で今後も継続し実施することにより、着実に児童たちの水難事故防止に貢献できると考える。

また、本校主催で行ったプログラムであるため、どのようにして小学校の教育課程に追加し、継続的に実施できるものにするかが課題である。なお来年度については、出前授業の枠組みを活用し要請ある小学校に対し実施する予定である。

5.　本学習内容報告書活用にあたっての留意点

実施にあたり、海・船といった特殊な環境下のもと実施するため、安全性に十分気を配り適切な人員配置を行う必要がある。

※実施した単元ごとに作成してください。

※写真、画像、図表等の使用可。必要に応じて記入欄やページ数を増やしても構いません。

※基本レイアウト

フォント：MS 明朝、10.5 ポイント / マージン：上下端 20mm、左右端 16mm

※ファイル名は「学習内容報告書_学校名」とし、複数提出する場合は学校名の後に数字を記載してください。

例：学習内容報告書_海洋市立パイオニア小学校 1

※年間指導計画（年間の指導計画における単元の位置づけが分かる資料）があれば別添資料として提出してください。フォーマットの指定はありません。